

# 電子版市民プレス

## 補遺③

### 応仁の乱の東西両軍

その動静は・・・

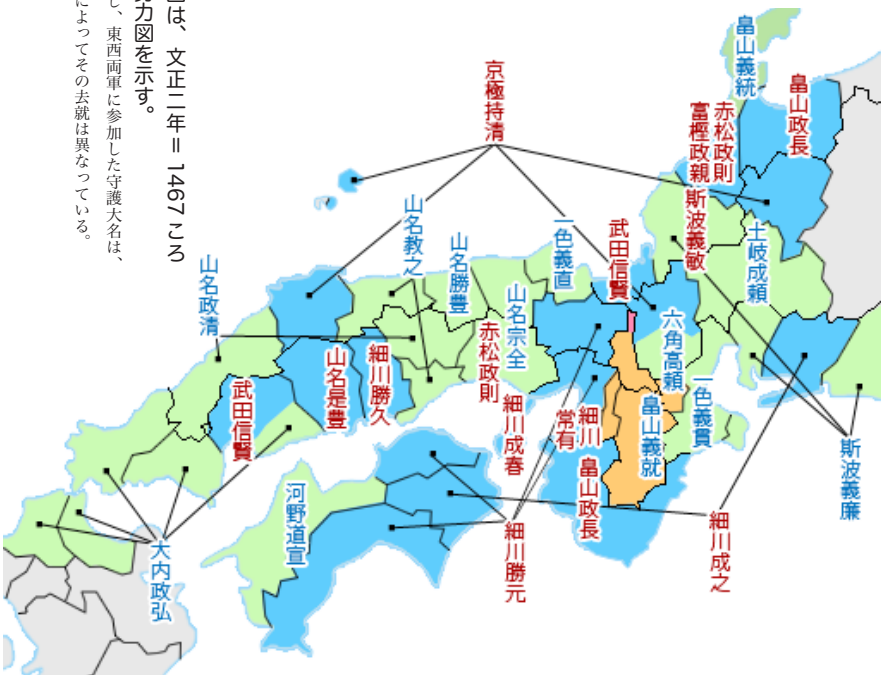
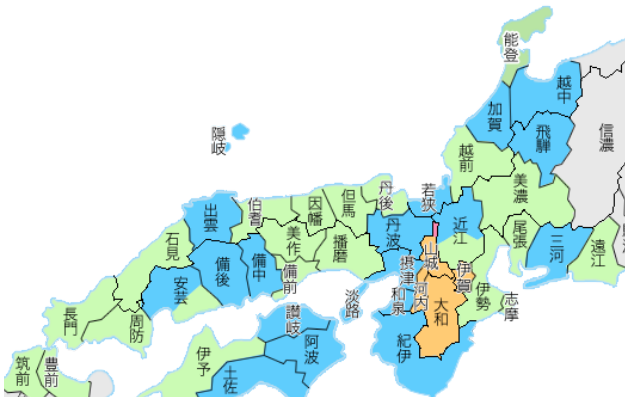
細川勝元像

龍安寺蔵



「応仁の乱」は京都が主戦場だったが、後半になると戦線は地方に拡大した。東軍の細川勝元が、西軍の諸大名（大内氏・土岐氏など）を攪乱する策に出たため、その範囲は拡大して、ついにほぼ全国（奥羽・関東・越後・甲斐を除く）に広がった。

ブルーは東軍、グリーンは西軍、オレンジは両軍伯仲を示す



両図は、文正二年（1467）ころの勢力図を示す。ただし、東西両軍に参加した守護大名は、時期によってその去就は異なっている。

タブレット地域紙「市民プレス」の電子版として編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

- PAGE 4 応仁・文明の乱 大乱の起因は・・・
- PAGE 5 有力守護大名の内紛が起こる -PAGE 7 争乱の経過は・・・
- PAGE 9 京都の市街戦が始まる
- PAGE 10 文明二年(1970)ころの守護大名・豪族の去就は・・・
- PAGE 11 東西に分裂した氏族 -PAGE 14 戦乱は地方に及ぶ・・・
- PAGE 15 大乱の結果は・・・

## 応仁・文明の乱

細川勝元と山名持豊(山名宗全)をそれぞれの大將として、諸国の大・小名が東西両軍に分れ、京都を主戦場として勃発した大乱は、応仁元年(1467)から文明九年(1477)まで、十一年間にわたって続き、「応仁の乱」といわれているが、応仁・文明の乱ともいう。

### 大乱の起因は・・・

室町幕府は有力守護大名の連合政権的な性格をもち、その上に立つ将軍は奉行人、奉公衆など、独自の権力基盤をもっていたので、幕政は有力な守護勢力との均衡の上で展開された。将軍の親裁権を高度に發揮していた將軍義満の時代以後、幕政の核として、三管領、四職家を中心とする、有力・守護大名で構成される重臣会議が力をもち、政務の議決機関として機能していた。ところが、嘉吉の乱で六代將軍義教が暗殺されると(嘉吉元年、1441)、大名の間の均衡は大きく崩れる。

有力守護大名の内紛が起ころ

永享五年（1433）、斯波家の義淳が死去すると、將軍義教は家督相続に介入、一族の内紛を誘発させて同家を弱体化させ、嘉吉の乱によって赤松氏も没落した。享徳三年（1454）には畠山家でも、当主の持国の家督継承権をめぐる内紛が起った。内紛を通じて、幕政に参与していた有力な大名家は淘汰され、重臣会議の機能は麻痺するに至った。

そのため、將軍義勝、義政の生母だった日野重子や、乳母（めのと、とも）の今参局など、側近の女性が幕政に容喙（横から口出し）するようになり、今参局が処刑されたのちは、政所（財政と訴訟を掌る）執事の伊勢貞親や、相国寺院内の陰涼軒主を務めた季瓊真薬など、守護家に非ざる側近勢力が台頭し、幕政は混乱に陥った。

幕府からの離脱へ・・・

さらに、嘉吉元年（1452）以後、数年ごとに徳政一揆が頻発したので、幕府の財政基盤だった土倉（現代の質屋）、酒屋などの経営は打撃を蒙った。関東などの地方では、幕府配下からの離脱、各地で起った戦乱の長期化、国人（土着の領主）層による幕府直轄領や荘園の押領が相次ぎ、幕府の財政基盤が不安定になっていった。

嘉吉の乱によって赤松氏の遺領を継承した山名氏は、このような状況においても、陰山陽にわたる七ヶ国の分国をもつ有力な守護として成長し、細川氏もまた畿内（都に近い圏内）、四国、山陽に八ヶ国の分国を、それぞれ一族の内紛もなく無傷で維持していた。そこで、この両守護家は、瀬戸内制海権を両分する形をとって、幕政の主導権を争う形勢となる。両勢力の領袖は、赤入道とよばれた前侍所頭人の山名持豊と、管領の細川勝元だった。このような幕政の動向と、有力な守護の勢力関係を背景としつつ、大乱の勃発が触発されるときが近付いていた。

大乱の直接的な原因は・・・

侍所頭人（警備に当たる御家人を統率するもの）とともに、京都を軍事的に押さえる要職とされていた山城国の守護職は、宝徳二年（1450）から、畠山氏が兼務していたが、畠山持国は、所領の譲渡を決め、実子（庶子）の義就（初名は亮義夏）に所領を譲った。義就は將軍義政に支持され、家督相続も認められる。ところが、畠山家の有力な家臣はそれに対して反抗し、彼の従兄弟に当る政久、政長を後継者として支援した。享徳四年（1455）父の死去によって、義就は正式に家督を継承する。しかし、彼と將軍義政との間の確執のために、長祿四年（1460）、幕府の命によって畠山の家督は政長に移行した。義就は幕府か

ら追放され、さらに論旨によって朝敵となったので、寛政四年（1793）、紀伊から吉野へと逃れた。

畠山氏の家督と山城守護を継承した政長に対して激しい敵意をもった義就は、家督と山城守護を奪回する機を狙った。この畠山氏の内訌に対して、細川勝元は終始政長を支持し、山名持豊も当初は勝元に従っていた。ところが、幕府軍を相手に孤軍奮戦する義就の軍事の才幹に注目した山名持豊が義就派に回ったので、細川勝元と対立することとなる。

畠山義就・政長の争いと、それに加担する山名、細川らの有力守護家の角逐は、こうして大乱の要因となったのである。応仁の乱の契機として、ほかに斯波義廉と義敏との対立、將軍義政に実子、義尚が誕生して、跡目となった義視との反目が挙げられているが、争いの経過から見ると、これらは副次的な要素と考えられている（参照…「ニッポニカ」、今谷明）。

### 争いの経過は・・・

文正元年（1460）、將軍義政は側近の伊勢貞親、季瓊真藁らの意見に基づいて、斯波家の家督を義廉から義敏に更迭し、また義政の弟の義視が謀反を起こすと噂で諸大名を刺激した。一方、義廉派の持豊、義視派の勝元は分国の軍勢を京都に集中したので、貞親、真藁は近

江（現・滋賀県）に逃亡する（文正の政変）。斯波家の家督は義廉に戻され、將軍義政の側近政治は崩壊したので、幕閣（幕府の再興首脳）は、勝元、持豊が激しく抗争する主導権争いの場と化した。

持豊派は迅速に京都に兵力を集中して、同年末には、驍将（勇敢な将）、畠山義就の大軍が大和から入京する。持豊は義政に強請して斯波義廉を越前、尾張、遠江、三国の守護職に還補（再び補任）官職の供与（こと）させて、応仁元年一月（1461）には義就が畠山氏の家督に返り咲く。窮地に陥った政長は山城上御霊（現・京都市上京区）で義就軍に挑戦する。ここに戦乱の火ぶたが切られた。しかし、緒戦に立ち遅れた政長は敢えなく敗走したので、持豊派は完全に幕府を掌握した。

勝元は戦勝気分でお断している持豊派の隙を縫って、地方で反撃に転じ、分国軍勢を入京させる。一方、赤松政則に播磨、備前、美作（現・岡山県津山市）の三国を討たせて山名氏を牽制する。また斯波義敏には越前を、武田信賢には若狭を、土岐政康には伊勢と持豊派の守護の分国に侵入させ、同年五月、幕府奉公衆の援助を得て花の御所を占拠することに成功する。將軍邸を占拠した勝元は、緒戦の不利を取り戻したので、持豊方は止む無く堀川の西に陣を構え、以後、勝元一派を東軍、持豊派を西軍と称することとなる。

東軍に参加した守護は細川氏、畠山政長、武田信賢京極持清、赤松政則、富樫政親、斯波義敏らで、対する西軍は山名氏、畠山義就・義統、斯波義廉、六角高頼、一色義直、土岐成頼、河野通春、大内政弘という面々で、九州と信濃以東の大名は加わっていない。東軍は將軍を擁する有利な立場から、西軍諸大名の守護職を次々に剥奪し、自派の一族や大名に補任したが、西軍大名も実力をもって新任守護に抵抗し、戦況は長期化して膠着の様相となる。

#### 京都の市街戦が始まる

応仁元年五月、京都市街戦が決行される。東軍が一色義直邸を包囲して戦火が拡大し、一時は勝元側が優勢にみえたが、同年秋に山名、大内の大軍が入京したため西側が盛り返し、西軍は將軍邸、相国寺など洛中の要所を占拠して東軍を洛外に追い払った。就中、畠山義就軍は東寺から西岡一帯を占拠し、自ら「山城守護」と称して乱終息時まで十年近く洛南地方を実力で支配した。翌年には洛外の主要社寺も殆どが兵火に見舞われた。これらは足輕、疾走の徒とよばれる傭兵の活動によるもので、東軍では侍所所司代（所司の代官）、多賀高忠の配下、骨皮道賢、西軍では山城の土豪、御厨子某などが彼らを差配した。この内乱は、傭兵の集団が主要な戦力を構成した最初の規模の大きい戦乱であったといわれている。東軍十六万、西軍十一万という両軍の動員兵力（『応仁記』による）には誇張があると

しても、各莊園、郷村からは莊官、在地土豪層を中心に騎馬、半甲冑、人夫で構成される兵団が徴発され、さらに京都周辺では京中悪党、疾走の徒などの足輕傭兵が補充された。後者の活躍が目立ったのは、地方の農民軍隊は長期の在京が困難だったからである。

#### 文明二年（1470）ころの守護大名・豪族の去就は・・・

##### 東軍の守護大名

細川勝元・摂津・丹波・讃岐・土佐                      細川成之・阿波                      細川常有・和泉半国

細川政久・和泉半国                      細川勝久・備中                      畠山政長・越中・(河内)

斯波義敏・斯波義寛・尾張・越前・遠江                      京極持清・飛騨・近江半国・出雲・隠岐

赤松政則・播磨・加賀半国（備前・美作）                      山名是豊・山城・備後

武田信賢・武田国信・若狭・安芸半国                      今川義忠・駿河                      小笠原政秀・信濃

富樫政親・加賀半国（開戦後間もなく西軍から寝返り）                      北畠教具・伊勢半国

大友親繁・豊後・筑後                      少弐頼忠・(肥前)・対馬・(筑前)                      菊池重朝・肥後

島津立久・薩摩・大隅・日向（但し、実戦には参加していない）

##### 東軍・その他

斯波持種、六角政堯、小笠原家長、木曾家豊、松平信光、吉良義真、成身院光宣、筒井順永、十市遠清、吉川経基、吉見信頼、益田兼堯、大内教幸、小早川熙平、河野教通、相良長統など  
西軍の守護大名

山名宗全…但馬・(播磨)

山名豊氏?…因幡

山名教之…伯耆・(備前)

山名政清…(美作)・石見

畠山義就…河内(紀伊・大和)

畠山義統…能登

斯波義廉…(越前)・(尾張)・(遠江)(何れも西軍内では守護職に留まる)

一色義直…丹後・伊勢半国

土岐成頼…美濃

六角高頼…近江半国

河野通春…伊予

大内政弘…長門・周防・豊前・筑前

渋川教直…肥前

西軍・その他

吉良義藤、飛騨姉小路家、富樫幸千代、毛利豊元、武田元綱、竹原小早川氏、島津季久、一色時家、戸田宗光、越智家栄、小笠原清宗など

### 東西に分裂した氏族

斯波氏 東軍

斯波義敏

斯波持種

|| 越前・尾張・遠江守護、三管領家 ||

西軍

斯波義廉

朝倉孝景★

畠山氏 東軍

畠山政長

|| 越中・河内・紀伊・能登守護、三管領家 ||

西軍

畠山義就

畠山義統

山名氏 東軍

山名是豊

|| 伯耆・因幡・但馬・石見・山城・備後守護、四職 ||

西軍

山名宗全

山名豊氏 山名教之 山名政清

京極氏 東軍

京極孫童子丸

京極政経 多賀高忠

|| 近江半国・出雲・隠岐・飛騨守護、四職。京極騒乱を参照 ||

西軍

京極高直

京極政光 多賀清直

六角氏 東軍

六角政堯

|| 近江半国守護 ||

西軍

六角高頼

土岐氏 東軍

世保政康☆

|| 美濃・伊勢守護 ||

西軍

土岐成頼

大内氏 東軍

大内教幸

|| 長門・周防・豊前・筑前守護 ||

西軍

大内政弘

小笠原氏 東軍

小笠原政秀

小笠原家長

|| 信濃守護 ||

西軍

小笠原清宗

富樫氏

東軍

富樫政親

|| 加賀守護 ||

西軍

富樫幸千代

武田氏

東軍

武田信賢 武田国信

|| 若狭・安芸半国守護 ||

西軍

武田元綱

島津氏

東軍

島津立久

|| 薩摩・大隅・日向守護 ||

西軍

島津季久

河野氏

東軍

河野教通

|| 伊予守護 ||

西軍

河野通春

吉良氏

東軍

吉良義真

|| 西条家・東条家 ||

西軍

吉良義藤

小早川氏 東軍

小早川熙平

小早川敬平

|| 沼田家・竹原家 ||

小早川盛景

小早川弘景

小早川弘平

※☆は西軍、★は東軍に、それぞれ寝返り

### 戦乱は地方に及ぶ・・・

三年を経過すると、戦局の中心は地方に移ったが、文明三年(471)、越前守護代、朝倉孝景たかかげの幕府帰参は東軍の優勢を決定付け、文明五年に両軍の総帥、持豊と勝元が相次いで死去すると、両軍首脳えんせんには厭戦気分が漲った。ことに山名氏惣領の政豊が東陣に帰参し、幕府から山城守護に補任されると、細川、山名両氏の対立という初期の構図は色褪せ、本来の立役者だった政長・義就の両畠山氏が、両軍を代表して徹底抗戦を叫ぶ状況へと変化したのである。こうして文明九年九月(477)、畠山義就が長期にわたって占領していた山城を退去し、同年の十一月には、大内政弘、土岐成頼らが分国に引き上げたので、京都を中心とする戦乱はようやく収束に向かった。政弘、成頼らは乱前に保持していた守護職を還補されたが、義就のみはついに赦免されず、実力で地盤を構築するほか存立の道を閉ざされたため、奮迅の勢いで河内の政長軍の攻撃に乗り出した。河内、大和、南山城ではなお戦火が続行して拡大し、義就は同年中に河内を制圧し、大和を勢力下に収めて、文明十四年(480)には南山城に侵入した。翌年、宇治川以南を実力占拠したが、やがて国人や農民は守護大名の畠山氏に対して一揆を引き起こす(山城国一揆)。

大乱の結果は・・・

義就、政長の抗争を軸として見ると、大乱が終息したのは、文明一七年（1485）、両畠山氏の影響を排除して自治を行う、「国中掟」を取り決めた山城国一掟の成立であり、畿内きないの農民、土豪の自立、成長が、無意味な守護大名の抗争に終止符を打つたと見ることもできよう。以後、大乱に参加した諸大名は、幕府の権威による分国支配が困難となり、実力によって領国の統治権を確保することが迫られるようになる。また幕府の実質的支配領域は漸次縮小され、長享元年（1487）の六角氏の征伐、明応二年（1493）の河内への出陣を通じて幕府の動員兵力は畿内近国の守護軍と奉公衆に限られるようになり、幕府の裁判権行使も畿内に限定される。このように畿内政権と化した幕府を実力で押さえるようになるのは細川氏だった。細川氏は他の大名と異なり、家督紛争を起こすことなく族的結合を維持し、乱中乱後を通じて首脳部が京都に常駐し、明応の政変で將軍の廃立を強行し、細川政元は、政敵畠山政長を自害させてからは完全に幕閣の主導権を掌握した。細川氏が畿内で戦国大名への道を踏み出したこの年は、戦国時代の始まりとすべきでは、とする説が有力なものになっている（参照：「ツボ」方、今谷明）。

一方、地方では荘園制が次々に解体され、また守護代層や有力国人が台頭して、彼らのうちには自ら戦国大名となる者も出現した。荘園制と在地領主制を基軸とする、中世国家の枠組みが最終的に崩壊するのもこの乱の重要な結果であり、歴史的にも大きな時代転換の契機はこの大乱に求められる。

都が舞台となった争乱にもかかわらず、將軍義政は、この乱で消滅した浄土寺跡に山荘を造営する。さらに、驚くべきことに、この東山殿を中心として、公家くげ、武家、禅を融合した新しい思潮、芸術（東山文化という）が義政によって創成され、後世の日本文化の展開に大きな影響を与えた。

しかも、戦乱を地方に避けた僧侶や公卿くぎょうたちによって、新しい文化は各地に伝播され、庶民の生活様式の中に源流として定着した。



「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行